2022 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

金丸雄一

１．事業実施の目的

人文地理学会大会での研究発表

２．実施場所

佛教大学　紫野キャンパス（京都市北区）

３．実施期日

2022 年 11 月 18 日（金）～　2022 年 11 月 21 日（月）

４．成果報告

●事業の概要

本事業の目的は、博士論文の主要な構成内容の一部を学会発表し、これからの博士論文の完成に向けて研究の精度と厚みを向上させることであった。そのために、人文地理学会の 2022 年大会一般発表プログラムにて口頭発表をし、大会二日間（11 月 19-20 日）の各プログラムにも参加した。

人文地理学会は、約 1,350 人の会員を擁する人文地理学を中心とする日本を代表する学会（1948 年発足）である。毎年 11 月に開催される大会は、特別研究発表、一般研究発表（口頭発表・ポスター発表・公募セッション）、研究部会、総会、懇親会などが二日間にわたって組まれ、例年 300 名を超える参加者が一堂に会する学会最大の行事となっている。しかし、ここ 2 年は COVID-19（新型コロナ感染症）の余波により、オンライン開催となっていた。今回は、久しぶりの対面開催として計画されてきたものの、感染拡大の状況を睨みながら、直前まで開催方法が変更される可能性があった。幸い会員たちが待ち望んできた対面開催が実現でき、各地から集まった研究者たちの熱気で会場が包まれることとなった。

初日の 11 月 19 日は、特別研究発表を皮切りにはじまった。2 会場に分かれてそれぞれ 2 名、計 4 名の研究者の発表があり、報告者は第二会場に参加した。初日の発表について、以下に、お一人のみ詳細に紹介する。湯澤規子先生（法政大学）による「食空間の比較歴史地理学―産業革命期の日米女性労働者に着目して―」では、研究者が労働ばかり扱い、労働“者”という人間を置いてきたのではという初発の問いから、論が展開された。生身の人間を研究の俎上にあげることの意義、労働者の主体性を労働と生活の時空間からみることが説かれた。

この発表では、フードスケープ／システムを研究する荒木一視先生（立命館大学）との質疑応答などが熱く交わされ、「歴史的空間軸」×「歴史性」の重要性が語られた。報告者が耳をそばだてたのは、「タクアンを一切れ食べる」ことの考察である。これを「女工哀史的な見方」とし

て「これしか食べられない」とだけ感じるのではなく、そこにはロットや規格が必要であり「経済性が生まれる」と読み取っていく。同時に、食べ物にはでき上がりのものもあれば、これから調理されるもの＝材料を集めねばならぬものがあり、地域―生活―人を結ぶ「地場の知識」が必要である。市川健夫（地理学）が提唱した「味の文化財」には、調理のリテラシーが深くかかわる。調理からの視座を踏まえた「食」への考察が、社会科学全般においてまだ少ないのではないか、というのが湯澤先生からの問題提起であった。また、印象に残ったのは、一線の研究者たちの討議だけではなく学部生からも鋭い問題提起がなされたことであった。

大会二日目の 11 月 20 日には、公募セッションが２会場で計８名、一般発表（口頭）が５会場で計３７名、ポスター発表が７名（初日から）、により行われた。どの会場も活気があったが、とりわけ公募セッション「国際比較アンケート調査に基づくグローバル都市の居住と就業の空間構造」は溢れるばかりの参加者となった。その会場ではつづく一般発表もおなじく時事性のあるテーマ（「空間ビッグデータを用いた都市内人口分布の時空間的把握―「コロナ禍」の京都市を事例に―」など）が多く、研究における旬をその盛況ぶりから感じることとなった。

これら発表の部が終わり、最後に「研究部会（大会研究アワー）」が開かれ、参加者たちはみずからの専門研究や興味の対象となる部会に移動した。「歴史地理研究部会」「地理思想研究部会」「都市圏研究部会」「地理教育研究部会」「観光空間研究部会」の５つの部会が行われた。報告者は、「GIS の進展と歴史学」がテーマであった歴史地理研究部会に参加した。ここでは、①歴史学や歴史地理学、②歴史資料やデジタルアーカイブなどのデータベース、③GIS 研究や空間分析技術、という三位一体による「サイクルによる高度化」の必要性が説かれていた。

以上が、二日間に渡り報告者が参加した人文地理学会大会の概要である。

●学会発表について

報告者の口頭発表は、人文地理学会大会二日目の第二会場（一般発表の部）にて行われた。発表題目は「海産資源をめぐるアマの漁撈採集空間の利用－三重県志摩半島甲賀の事例－」である。

これまで日本のアマ（海女・海士）を対象にした研究は、日本民俗学や歴史学・人文地理学・文化人類学・社会学などの人文／社会科学の領域から，生理学や海洋生態学など自然科学的諸分野，それらの知見を交えた労働科学などの横断的な領域まで，さまざまな学問分野の視点から数多くの成果が蓄積されてきた。報告者は今回、いままでの生態人類学と民俗学の統合した視点での研究から踏み込み、空間の把握に力点をおきその空間の解釈をフィルターとして漁業者（アマ）の行動を分析する漁業地理学／漁場水産地理学の視点から発表した。

漁業地理学においては、漁村（陸上域）と漁場（水域）という研究対象が二分化してしまったこと、漁場そのものの性質が流動的および立体的構造であるがゆえに地理学的に十分に把握できなかったこと、が指摘されてきた。生産の場である漁場こそ、漁村が成立し維持していくための基盤であり、自然環境の総体たる漁場と漁村とを関係づけて把握する必要も説かれてきた。

以上を踏まえて、報告者は、みずから潜水をしてアマの活動を観察してきた蓄積をとおし、水中の漁撈のみならず陸域での採集までを含めた「漁撈採集空間の利用」の実態とその変化を把握

することとした。アマの漁撈（採貝）については、GPS 魚探により描き出した海中地形の等深線図をもとに、アマ集団における空間利用の特徴や個人差を明らかにした。採集（採藻）については、潮間帯における種ごとの垂直分布に言及し、アマの垂直的空間利用の実態を述べた。海藻漁においては採集するだけではアマの生産活動は終わらずに、天日干しから付着物除去などの仕上げ作業、製品の箱詰め作業まである。海域から陸域にまたがる潮間帯を含めた漁撈採集空間＜イソ（磯）＞だけではなく、潮間帯からつづく汀／堤防や漁港までの＜ハマ（浜）＞まで、全面的な空間利用をしてアマの経済活動が成り立つ。これを垂直的な空間把握をまじえ解明したことが、本発表の独自性となった。

報告者が提示した「イソからハマまでの全面的な空間利用」「マージナル空間を巧みに利用するアマの経済活動の戦略」は、発表後の質疑応答にてさまざまな議論とコメントをいただけた。今後の課題として噛みしめる部分もあった一方で、ある程度の手応えも感ずることができた。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって学会の大会参加ができることとなり、みずからの研究に関する有益な視点を獲得できた。発表とその後の質疑応答だけではなく、終了後の懇談の場でも一線の研究者の方々から重要な助言を賜った。いままで報告者の研究においては、その内容の絞り込みが不足してきたが、焦点の当て方とその精度を獲得していく必要性を学んだ。これらの成果を活かし、発表内容を学術論文にまとめて機関誌に投稿することが、今後の目標である。

●本事業について

本事業により、今後の研究と論文執筆の見通しのうえで大いに進展が得られた。今般派遣を認可していただいたことに深く感謝の意を表したい。専攻の先生方および事務ご担当の皆さまに心より御礼申し上げます。